

# 放課後等デイサービスにおける学内実習に関する研究

－実習・ボランティア参加者数の推移と実習アンケートの結果から－

Study on practical training in after-school care service  
- From the changes in the number of trainees and volunteers and the results of the practical training questionnaire survey -

阿部 崇\*・新井 豊吉\*・小島 好美\*・宮島 祐\*・芦沢 文子\*\*・浜中 里美\*\*  
・栗原 博\*\*・村野 志朗\*\*

(\*子ども支援学科、\*\*かせい森の放課後等デイサービス「つくし」)

## 1. はじめに

放課後等デイサービスは、2012年4月に児童福祉法（昭和22年法律第164号）に位置づけられた障害児通所支援の1つである。小学生から高校生（6歳から18歳）までの児童生徒の放課後および長期休暇中の支援のための活動支援を目的とした事業である。放課後等デイサービスは、支援を必要とする障害のある子どもに対して、学校や家庭とは異なる時間、空間、人、体験等を通じて、個々の子どもの状況に応じた発達支援を行うことにより、子どもの最善の利益の保障と健全な育成を図るものである（厚生労働省社会・援護局,2015）。放課後等デイサービスでは、生活能力向上訓練、集団生活適応訓練、創作活動などを継続的に提供し、障害児の自立への支援を行っている。利用に際しては個別の支援プログラムを作成し、特別支援教育の対象となる児童生徒が主体的に学習に取り組む態度を養うために、視聴覚教材、教育機器など個々の支援ニーズに適した療育を行っている。

本学狭山校舎内には東京家政大学かせい森の放課後等デイサービス「つくし」（以下、つくし）が設置されており、地域に在住する支援を要する児童生徒が利用している。つくしは、子ども一人ひとりの発達を見据えて自立と充実した人生を支援することを目標に運営されている。具体的には身体活動、音楽活動、絵画造形活動を通じて、好きなこと得意なことに取り組むことで、児童生徒たちの持っている可能性を広げ、自立を支援している。月曜日は運動、火・水曜日は音楽、木・金曜日は絵画・造形を実施しており、各曜日の前半は小学1～3年生の低学年、後半は小学4～6年生、中学1～3年生の高学年を対象にしている。また、つくしは専門医（かせい森のクリニック）と連携し、保護者の子育て支援（相談活動）を実施し、専門職を目指す東京家政大学の学生が実践経験を積む場（実習、ボランティア）の提供を行うなど多様な役割を担っている。

本学子ども学部子ども支援学科の特別支援学校の教職科目においては、講義形式の基礎的な知識の習得だけでなく、実践で役立つ体験的な学習や事例検討等を積極的に取り入れた授業を展開している。一方、教育実習生を受け入れる特別支援学校では、教育実習の内容や体験をより深めることを目的に、実習前にボランティア活動が実施されている。その中では、特別支援学校での教育に触れ、在籍する児童生徒との関わりとして、障害のある子どもを理解し、実際の授業や生活指導を目にする機会を提供するなどの取り組みが行われている。この特別支援学校ボランティアに参加するには、土日や夏休みなどに数日間のボランティア事前講習を課している学校が多い。特別支援学校での介護等体験がない本学科の教職課程においては、早い時期からの特別支援学校におけるボランティア参加は貴重な機会となり得る。しかしながら、本学科では現状、十分な活用には至っていないといえる。本学科では、1年次と2年次に幼稚園教諭免許状および保育士資格の取得に必要な科目を履修し、特別支援教育教職科目の多くを3年次に履修し、その3年次には保育所実習が組まれている。これらの授業や保育関連の実習日程が、特別支援学校のボラン

ティア事前講習日に重ることが多いため講習に参加できず、結果として特別支援学校のボランティアに早い時期から参加することが困難となっている。学生の中には、実習前のオリエンテーションで初めて学校見学をする者もいる。特別支援学校の教育実習開始時に、障害のある児童生徒に関わる経験が不足していることが懸念されるため、特別支援教育の専門科目履修者を対象に、つくしにおける実習を授業の一貫として取り入れてきた経緯がある（野澤ら,2019）。

そこで本研究では、幼稚園教諭免許状を基礎免許とする特別支援教育教職課程における教育のあり方を検討することを目的とする。本稿ではつくしと連携した取り組みである実習・ボランティア参加者数の変遷と実習で得た学びについて明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### (1) 調査①実習・ボランティア参加者数の推移

つくしにおいて実習もしくはボランティアに参加した子ども学部子ども支援学科の学生を対象とした。平成28年度から令和3年度において実習もしくはボランティアに参加した学生数を計上した。

### (2) 調査②令和3年度実習アンケート調査

令和3年度につくしで実習を実施した「特別支援教育実習（事前事後指導を含む）」を履修する子ども学部子ども支援学科の3年生39名を対象とした。調査日は実習最終日とし、実習録の中でアンケート調査を実施した。①子どもの状態に合わせた援助、②子どもの注意（意識）、③子どもに分かりやすい指示・言葉かけ、④子どもにわかる称賛、⑤子どもの行動直後の称賛、⑥指導者との連携、に関する5件法による調査、さらには「体験実習で学んだこと」について自由記述による調査を実施した。なお、対象者には、個人情報保護、学術的利用、回答は自由意思で撤回できること、データの収集方法とそれらの管理、結果の公表に関して同意を得た。

### (3) 実習・ボランティア活動の概要

実習・ボランティア活動の受け入れ期間は、つくしを利用する子どもの様子が落ち着く5月の大型連休明けから年度末の3月までとしている（図1）。図1の実線矢印は各実習の実施期間を示し、破線矢印はボランティア活動の受け入れ期間を示している。以下、2年次実習、3年次実習、ボランティア活動の詳細を記す。

#### 1) 2年次個別実習

##### ①対象学生

特別支援教育専門科目「知的障害児の心理・生理・病理」を履修する子ども支援学科2年生

##### ②目的

- ・障害のある児童生徒の指導・観察を通して、自己の保育観に繋がる経験を重ねる。
- ・実習の基本姿勢を学び、子どもたちと関わる充実感を味わう。

##### ③活動内容

個人での個別実習を2回実施とし、見学、観察、活動の支援、実習録の記述、レポートの提出を行う。

#### 2) 3年次実習（個別・グループ）

##### ①対象学生

特別支援教育専門科目「特別支援教育実習（事前事後指導を含む）」を履修する子ども支援学科3年生

##### ②目的

特別支援教育実習事前指導として、障害のある児童生徒の教育のための基礎的知識の理解と指導法を

学ぶ。

③活動内容

個人で個別実習を2回、5名以内のグループでグループ実習を3回、計5回の実習とする。3～4回目の実習では児童生徒の観察を行いながら活動の支援、さらにはプレ実習授業を行う。5回目の実習ではグループで作成した学習指導案を基に実習授業を実施する。実習授業後には反省会を実施し、授業参観した特別支援教育担当教員より指導を受ける。また、各回において実習録を記述し提出する。

3) ボランティア活動

つくしにおけるボランティア活動は2年次から4年次までの学生を受け入れている。2年次の特別支援教育専門科目「知的障害児の心理・生理・病理」での個別実習を経て、特別な支援を要する子どもについてある程度の知識を得た段階の学生をボランティアとして受け入れている。

①対象学生

ボランティア参加を希望する子ども支援学科2年生、3年生、4年生

②目的

- ・ 障害のある児童生徒の指導・観察を通して、自己の保育観に繋がる経験を重ねる。
- ・ 実習の基本姿勢を学び、子どもたちと関わる充実感を味わう。

③活動内容

個人で申し込み、見学、観察、活動の支援を行う。

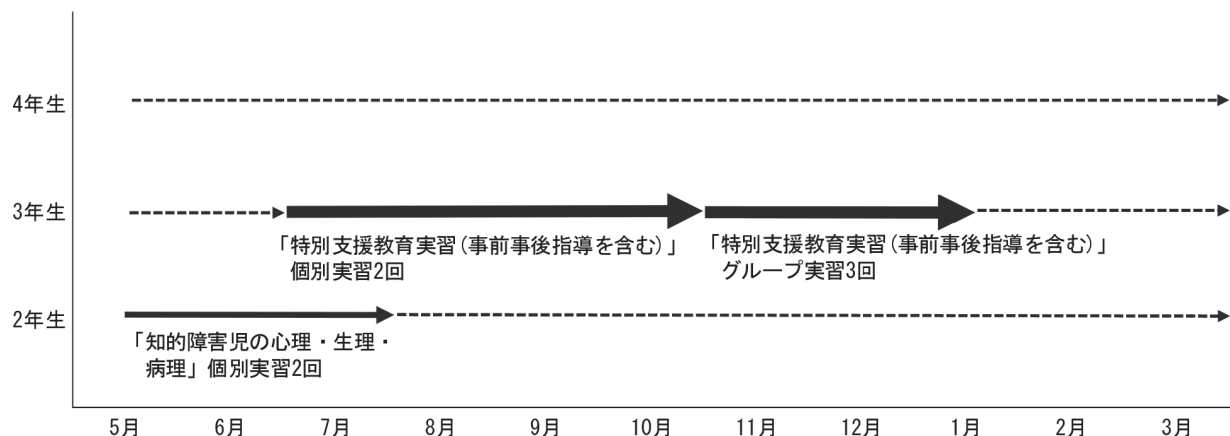


図1 2022年度子ども支援学科の各学年における「つくし」の実習とボランティア活動の実施

3. 結果

(1) 調査①実習・ボランティア参加者数の推移

平成29年度よりボランティアの受け入れが開始され、翌年の平成30年度より実習の受け入れが開始された。実習・ボランティア参加者数は順調に増加し、令和元年には781名が実習・ボランティアを経験した。しかし、令和2年度においてはコロナ禍となり、「知的障害児の心理・生理・病理」においては希望者のみの実習実施となり、実習・ボランティア参加者数は減少となった。令和3年度より増加傾向にある。

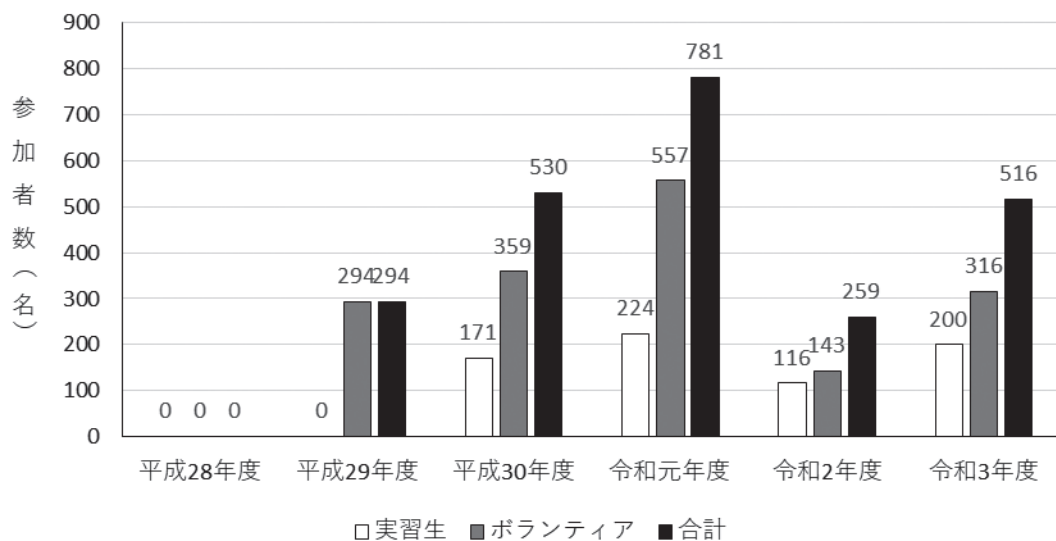


図2 つくしにおける実習・ボランティア参加者数の推移

(2) 調査②令和3年度実習アンケート調査の結果

1) 子どもの状態に合わせた援助 (選択)

子どもの状態に合わせた援助がどの程度できたか質問したところ、「まあまあできた」が最も多く18名(46%)が回答し、次いで「少しできた」が11名(28%)、「よくできた」が7名(18%)であった。「あまりできなかった」が3名(8%)、「ほとんどできなかった」の回答は見られなかった(図3)。

2) 子どもの注意 (選択)

子どもの注意(意識)を向けさせることができたか質問したところ、「まあまあできた」が最も多く16名(41%)が回答し、次いで「少しできた」が13名(33%)、「よくできた」が6名(16%)であった。「あまりできなかった」が4名(10%)、「ほとんどできなかった」の回答は見られなかった(図4)。

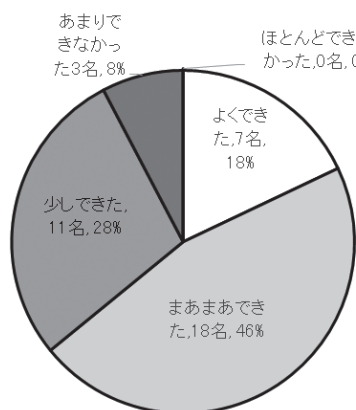


図3 子どもの状態に合わせた援助 (n = 39)

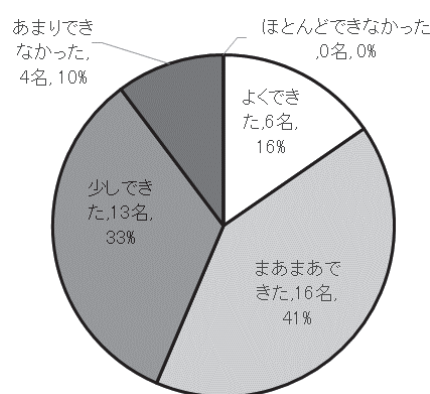


図4 子どもの注意 (意識) (n = 39)

3) 子どもに分かりやすい指示・言葉かけ (選択)

子どもに分かりやすい指示・言葉かけができたか質問したところ、「まあまあできた」が最も多く18名(46%)が回答し、次いで「少しできた」が11名(28%)、「よくできた」が7名(18%)であった。「あまりできなかった」が3名(8%)、「ほとんどできなかった」の回答は見られなかった(図5)。

4) 子どもにわかる称賛（選択）

子どもが分かるようにほめることができたか質問したところ、「よくできた」、「まあまあできた」、「少しできた」が共に13名（33%）であった。「あまりできなかつた」、「ほとんどできなかつた」の回答は見られなかつた（図6）。

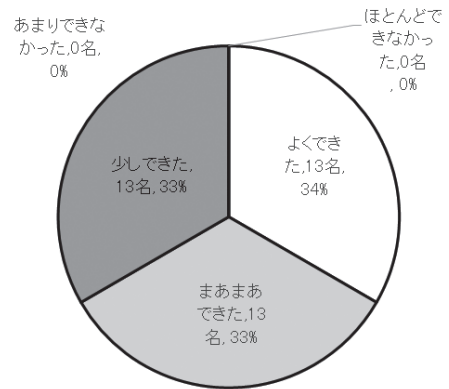
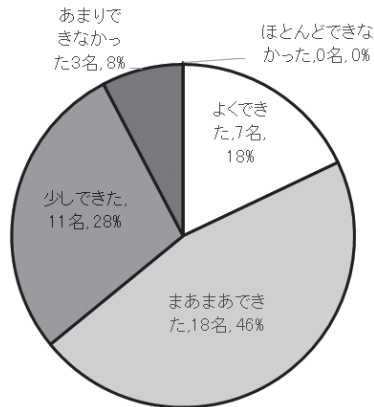


図5 子どもに分かりやすい指示・言葉かけ (n = 39)

図6 子どもにわかる称賛 (n = 39)

5) 子どもの行動直後の称賛（選択）

子どもの行動の直後にほめることができたか質問したところ、「まあまあできた」が最も多く17名（44%）が回答し、次いで「よくできた」が14名（36%）、「少しできた」が6名（15%）であった。「あまりできなかつた」が2名（5%）、「ほとんどできなかつた」の回答は見られなかつた（図7）。

6) 指導者や他の学生との連携（選択）

指導者や他の学生との連携ができたか質問したところ、「まあまあできた」が最も多く13名（33%）が回答し、次いで「少しできた」が12名（31%）、「よくできた」が8名（21%）であった。「あまりできなかつた」が6名（15%）、「ほとんどできなかつた」の回答は見られなかつた（図8）。

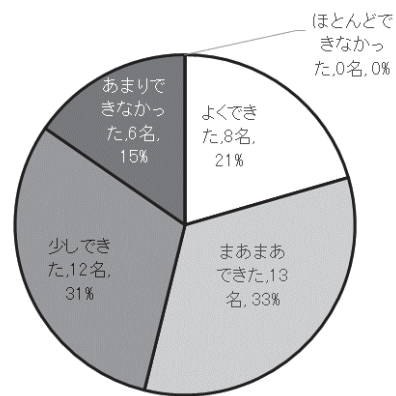
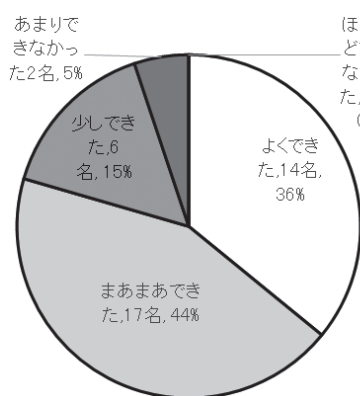


図7 子どもの行動直後の称賛 (n = 39)

図8 指導者や他の学生との連携 (n = 39)

7) 実習で学んだこと（自由記述）

「体験実習で学んだこと」について自由記述で求めたところ、以下のような回答が見られた（一部抜粋、原文のまま）。回答は質問肢同様の6つのカテゴリとその他に分けて整理した。

①子どもの状態に合わせた援助

- ・実態に合わせた言葉かけが有効であると体験実習を通して身を持って感じた。

- ・子どもの持つ世界観を大切にすること、見ている世界を知ろうとすることの大切さを学ぶことができた。
  - ・子どもの観察をすることが大切だと実感した。
- ②子どもの注意（意識）
- ・一人ひとりと視線を合わせることでMTに意識を向けることができたり、「見ているよ」と伝えたりすることができるのだと学んだ。
  - ・全体に視線を向けつつも一人ひとりきちんと視線を合わせること、笑顔を大切にすることなどさまざまな学びがありました。
- ③子どもに分かりやすい指示・言葉かけ
- ・言葉かけのタイミングをたくさん学ぶことができた。
  - ・「具体的」に、「簡潔」に伝えることが大切だと今まで学校の授業で学んできたが、自分が伝わりやすく伝えているつもりでも実は伝わりにくいことを感じた。
- ④子どもにわかる称賛
- ・「ほめること」の重要性を実際に学ぶことができた。
  - ・先生方が子どもの良いところを進んで褒めたりしているのは、子どもの自己肯定感を高めるためだと分かりました。
  - ・具体的に分かりやすくほめることが大事であるということを学ぶことができた。
- ⑤子どもの行動直後の称賛
- ・即座に具体的にほめることで、成功体験となり、自信に繋がるのだと実感した。
  - ・その都度すぐに評価、褒めることで、その子にとって頑張りを認められた経験になり、自己肯定感を上げることに繋がることを学びました。
- ⑥指導者との連携
- ・他の学生や指導者と連携し、実態把握をした上で、5回目の実践につなげることができ、連携の大切さについて実感しました。
  - ・個別の支援はSTが行うことで、MTは全体の支援を進めることができるといったように指導者間の連携が大切であることを学びました。
- ⑦その他
- ・活動を計画し、指導案作成まで経験させていただき、一つの活動を作り上げる上での難しさや大変さなどを学ぶことができた。
  - ・役割や動き、配慮することなど、細かいことまで準備することで、自分たちも安心して臨むことができ、活動も児童たちが楽しめるものになりました。
  - ・「待つ」という支援を行うことで、生徒の主体性を尊重し、経験をより増やせることを学びました。

#### 4. 考察

調査①実習・ボランティア参加者数の推移では、平成28年度から令和3年度まで間の実習・ボランティアの変遷について明らかとなった。平成29年度よりボランティアの受け入れ、30年度より実習の受け入れが開始され順調に増加したが、令和2年度から新型コロナウイルスの流行により特にボランティア参加者数が大きく減少し、実習・ボランティア数に影響していることが明らかとなった。令和2年、3年については、いずれも特別支援学校における教育実習（4年生）の一時中断はあったものの、つくしにおける実習（3年生）は通常通り実施された。つくしでは、アルコールによる手指消毒の励行と実習・ボランティアを実施する学生は個別のフェイスシールドを着用し、細心の注意を払った上で実施された。コロナ禍ではあったが学習指導案を作成して実習授業をすることができたことは教育実習を控えた実習生にとって大

きな経験となったといえよう。池田ら（2013）が実習前の特別支援学校等でのボランティア活動が役立ったかどうか実習を行った学生にアンケート調査を実施したところ、8割を超える学生が「役に立った」との回答があったことを報告している。このことから、つくしにおける実習・ボランティアの有効性は高いといえよう。

調査②令和3年度実習アンケート調査では、3年次の特別支援教育専門科目「特別支援教育実習（事前事後指導を含む）」を履修する学生を対象に実施した。「子どもの状態に合わせた援助」では、「よくできた」と「まあまあできた」を合わせて25名（64%）と比較的高い回答を得た。自由記述より子どもの観察をしたうえで、実態に合わせた言葉かけが有効であると身を持って感じたことが推察された。また、「子どもの注意（意識）」では、「よくできた」「まあまあできた」を合わせて22名（57%）と質問の中で2番目に回答数の低い結果となった。自由記述には「全体に視線を向けつつも一人ひとりきちんと視線を合わせることで、笑顔を大切にするなどさまざまな学びがありました」との回答があったように実習を通して注意を向ける難しさの気づきがあったと考えられた。「子どもに分かりやすい指示・言葉かけ」では、「よくできた」と「まあまあできた」を合わせて25名（64%）と比較的高い回答を得た。自由記述より「言葉かけのタイミングをたくさん学ぶことができた」との回答がある等、指示・言葉かけの機会があり実践できたと考えられた。「子どもにわかる称賛」では、「あまりできなかった」「ほとんどできなかった」は0名（0%）であり、ある程度称賛ができたと思われた。自由記述より具体的に分かりやすくほめることについて学びを深めることができたと考えられた。「子どもの行動直後の称賛」については「よくできた」「まあまあできた」を合わせて31名（80%）と質問の中でもっとも回答の多い結果となった。「即座に具体的にほめることで、成功体験となり、自信に繋がるのだと実感した」、「その都度すぐに評価、褒めることで、その子にとって頑張りを認められた経験になり、自己肯定感を上げることに繋がることを学びました」との自由記述の結果から、実習の中で実体験として即時評価・賞賛の有効性を実感したと推察された。「指導者と他の学生との連携」については「よくできた」「まあまあできた」を合わせて21名（54%）と質問の中でもっとも低い結果となった。その背景には自由記述に「他の学生や指導者と連携し、実態把握をした上で、5回目の実践につなげることができ、連携の大切さについて実感しました」、「個別の支援はSTが行うことで、MTは全体の支援を進めることができるといったように指導者間の連携が大切であることを学びました」と回答があったように連携が不十分だったこと、さらにはその重要性に気づきがあったと考えられた。また、絵画・造形活動においては個別活動の性質から指導者や他の学生との連携をする機会が少なかったことが推察された。また、上記の他に学習指導案の作成により活動を作り上げたことが教育実習を前にして有意義な実習となったことや、詳細な準備をすることの大切さ、「待つ」支援の重要性、主体性の尊重等多くの学びを得られたとの自由記述が見られた。このことから、つくしでの実習は実践で役立つ体験的な学習であったといえよう。

## 5. おわりに

本調査の結果から、平成29年度より多くの学生がつくしにおいて実習・ボランティアに参加し、学びを深めており、教育実習のプレ実習として大きな役割があったといえよう。池田ら（2011）が、特別支援教育実習前には多くの学生が期待と不安をもちながら実習に臨んでいることを報告しているように、多くの学生が不安を持っていると考えられる。特に子ども支援学科の学生は基礎免許が幼稚園教諭免許状であるが、実習校の大半に幼稚部は無く、小学部、中学部を中心に配属されることから、小学生・中学生を対象にしたつくしでの実習・ボランティアはより効果的であると考えられる。例年、3年次の実習を終えた後にもボランティアに積極的に参加している4年生が見られることから、実習前の不安を払拭するための有効な活動であるといえよう。

昨今コロナ禍となり、特別支援学校教育実習において実習オリエンテーションがオンラインによる実施

や実習直前に実施されるなど思うように実践を積み重ねることができていない状況にある。基礎疾患の多い子どもが通う特別支援学校では事前ボランティアの受け入れに慎重にならざるを得ない事情もある。コロナ禍では例年以上に学内での実習・ボランティアは貴重な体験であるといえよう。今後も継続し、つくしでの実習・ボランティアを実施し、実習成果の詳細な検証と効果的な実習について明らかにする必要があるだろう。

## 文献

- ・厚生労働省社会・援護局（2015）放課後等デイサービスのガイドライン.厚生労働省.
- ・野澤純子・阿部崇・末廣杏里・村野志朗・宮島祐（2019）教育教職課程における学内実習の役割（1）放課後等デイサービス「つくし」の実習を通して.東京家政大学教員養成教育推進室年報,6,91-96.
- ・野澤純子・芦沢文子・浜中里美・栗原博・村野志朗（2021）放課後等デイサービスにおける好みの活動を通じた支援－自己肯定感の視点による一考察－.東京家政大学教職センター年報,13,124-131.
- ・池田浩明・小川透・武石詔吾（2013）特別支援学校の教育実習における学生の意識について(2)－期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から－.藤女子大学人間生活学部紀要,50,95-102.
- ・池田浩明・小川透・武石詔吾（2011）特別支援学校の教育実習における学生の意識について(2)－期待・不安及び意見・要望に関するアンケート調査から－.藤女子大学人間生活学部紀要,48,125-131.

## 謝辞

学内実習及びボランティアにご支援いただいた、かせい森の放課後等デイサービス「つくし」職員の皆様に心よりお礼申し上げます。